



年頭所感

会長 森口 繁一

1975年は、わが日本オペレーションズ・リサーチ学会にとって、ひいてはわが国のORにとって、画期的な年になりそうである。

何よりも重要なのは、いうまでもなく「オペレーションズ・リサーチ合同国際会議」の開催である。IFORSとTIMSの会議があい次いでわが国で開かれることは、きわめて意味深いことであり、われわれは全力をあげてこれを立派にやりとげたいと思う。経済的にはきわめて困難な状況のもとにあるけれども、われわれの熱意と努力によって、東から西から、また南から北からのお客さんたちと、交流を深め、世界人類の幸福のためにORを役立てることに大きな刺激となるようにしたいものと願っている。

この国際会議には、大きな特色がいくつかある。はるばる遠い国から来日する人たちに日本をできるだけよく見てもらうために「現場討論会 (Field Trip)」を多数用意するのがその一つである。また、これと結びつけての「実例研究会 (Workshop)」も特色の一つである。さらにまた、学会の新しい発表形式として注目されるようになってきた「市場式討論会 (Forum/Paper Fair)」を大幅にとり入れようというのも新しい特色である。

この最後の「市場式討論会」は、国内の大会の形式としても、従来のやり方の多くの欠点を除き、より豊かな討論の場を提供するという点ですぐれていると思われるので、この春の大会では、これを——国際会議のリハーサルも兼ねて——かなりの規模で実施してみたいと思っている。これについては他の有力な学会も期待をもって注目しようとしているふしがある。

かねてから編集を進めてきた『OR事典』も、いよいよ春には出版されるであろう。これは法人化記念事業にふさわしく、文字どおり学会の総力をあげての努力の集積であって、私の見るところでは世界に誇るに足る立派なできばえである。

このような諸条件を好機として、われわれは本年を学会の、そして日本のORの、大きい躍進の年としたいと念願している。具体的には、学会会員の一大増強をはかること、会員へのサービスの向上をはかること、学会の財政の基礎を安定させること、など、課題は山ほどある。

私は学会を通じての会員相互の意見の交流と、ORの専門家として伸び続けるための支援がその骨幹をなすべきであると思う。本年度の事業として新たに進めようとしているORDP (OR教育用データおよびプログラム) プロジェクトも、その成果が実って会員へのサービス向上に寄与するにちがいないと期待している。

とにかく、今年は大へん多忙な、しかしやりがいのある年となるにちがいない。会員のみなさんの積極的な参加と協力を心からお願いする次第である。



編集委員長 宮 沢 光 一

OR は interdisciplinary な性格のものであるといわれ、さらには transdisciplinary なものでなければならぬとの主張も聞かれる今日このごろである。はたしてわが国の OR 研究がそうした OR 本然の姿をとっているであろうか。

OR では問題認識が先決であり、そして対象のモデル化から出発するといわれている。このとき Hegel の “Every thing is related to every thing else” という言葉が思い出されてならない。もちろん有限能力の人間が研究対象として問題を把握するためには、どこかで一線を画さなければならぬことはいうまでもない。しかしその領域の外の部分、すなわち環境の存在を無視することは許されないであろう。その上で、相互依存関係にある多くの部分——サブ・システム——から成る全体系としてのモデルが設定されなければならない。このことはある目的のために、多くの部品から成る機械を設計することにもなぞらえられるであろう。このときその部品に欠陥があってはならないことはいうまでもない。しかし他面、その一部品をいくら精巧に造ってみたとところで機械全体がうまく機能する保証はない。どうかすると OR 研究といいながら一部品の精緻化に憂身をやつす場合が多いのではないかと危惧するものである。

問題認識といっても、OR にとって、それが皮層的であることは許されない。たとえば運送業でストライキが起こっているとしよう。このときそのストライキを解決することをもって問題認識としてよいのであろうか。運送業勤労者の賃金を上げることによってストライキが中止されれば、それで問題が解決したかのようにみえるかもしれない。しかしそのことの他業種勤労者の賃上げ要求への影響は、また消費物資の価格へのはね返りはどうなるのであろうか。そこまで見きわめた上での問題設定が要求されるであろう。高熱が病気の徴候であるように、ストライキは問題の徴候ではあっても、問題そのものではないのである。問題はもっと深く認識されなければならない。

こうして考えてくるとき、OR における最適解なる概念についても反省されなければならないのではなからうか。利潤、あるいはその期待値を最大にすることをもって決定基準にとれるのは、きわめて限定された問題においてのみであろう。むしろ互いに相容れない要求項目の調和のとれた達成が望まれるのが現実であろう。最近、multiple-criteria の理論的研究が注目を浴びてきているのもこうした事実を反映するものである。

年頭の所感といいながら、愚にもつかぬことを書きたてたのかもしれない。老人の戯言とご寛恕いただきたい。幸いなことに、今夏わが国で IFORS/TIMS の国際会議が開かれることはご承知のとおりである。この会議を通じて諸兄とともに OR 研究の本質をしかと見きわめたいものと念願している。——ご多幸をお祈りしながら——